

# 君 津 市 滝 原 塚

— 一般県道三島大多喜線特殊改良工事第1種に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

1 9 9 1

千 葉 県 土 木 部  
財団法人 千葉県文化財センター

きみ つ し たき はら つか  
君 津 市 滝 原 塚

— 一般県道三島大多喜線特殊改良工事第1種に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

1991

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県のはほぼ中央に位置する君津市は、房総丘陵の元清澄山・清澄山に源を発し東京湾に流入する小糸川・小櫃川の両河川が貫流し、その恵みを大いに受け、古来より育まれてきた文化遺産が数多く残されています。

現在君津市は、海岸部分は工業地帯として著しい発展を遂げており、それに伴い内陸部に向かって都市化が進行しつつあります。即ち、上総新研究開発都市構想をはじめとし東京湾横断道路・東関東自動車道路等の大規模開発が計画されている等、一層の発展が期待されます。更に、房総半島南部の南房総リゾート開発の計画も進行中で、君津市の内陸部はその役割の一端を担うものと思われます。ところが、近年の開発の進行が急速なため、交通網の整備が立ち遅れ気味となり、特に、道路網の整備は強く望まれるところとなっています。

そこで、千葉県では道路網整備の一環として県道三島大多喜線の改良工事を実施してきました。ところが、この度事業予定地内に埋蔵文化財包蔵地1か所が所在していたため、千葉県土木部と千葉県教育委員会との間で、その取扱いについて慎重な協議が重ねられた結果、事業の計画上現状保存は困難であり、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査に当たっては、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、平成3年8月に発掘調査と整理作業を実施しましたが、その結果、供養塚1基の調査により中世末の信仰形態の一端が解明されるに至りました。これにより、遺跡周辺に所在する城郭・砦・寺社と在地の人々との係わり合いについて考える材料が追加されたこととなります。

この度、調査成果をとりまとめて、報告書として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてだけでなく、文化財の保護・普及のため広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理・刊行に至るまで多大な御協力、御指導をいただいた千葉県土木部、千葉県君津土木事務所上総支所、千葉県教育委員会、君津市教育委員会をはじめとして、地元関係者・諸機関に深くお礼を申し上げます。

平成3年12月

財団法人 千葉県文化財センター  
理事長 岩 瀬 良 三

## 凡 例

1. 本書は、千葉県君津市滝原字滝原台62-2に所在した滝原塚（たきはらつか）の発掘調査報告書である。なお、本遺跡の調査コードは、市町村コード225と、遺跡コード006とを組み合わせて225-006とした。
2. 調査は、一般県道三島大多喜線特殊改良工事第1種に伴う埋蔵文化財調査として千葉県の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。
3. 発掘調査は、平成3年8月1日から8月26日まで、整理作業及び報告書の作成作業は発掘調査と一部並行しながら8月31日まで実施し、調査部長 天野 努、部長補佐 阪田正一、班長 深澤克友の指導のもとに主任技師 加藤正信が行った。
4. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。（敬称略）  
千葉県土木部、千葉県君津土木事務所上総支所、千葉県教育委員会、君津市教育委員会、財団法人君津郡市文化財センター  
梶田真夫、梶田平治

# 目 次

## 本 文 目 次

第1章 序 章	
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 遺跡の位置と環境 .....	1
第3節 調査の概要 .....	4
第2章 遺構と遺物	
第1節 滝原塚 .....	5
第2節 遺物 .....	7
第3章 まとめ	
第1節 滝原塚の性格について .....	11
第2節 周辺遺跡等の関連について .....	12
第3節 結語 .....	12

## 挿 図 目 次

第1図 滝原塚及び周辺の主な遺跡 .....	2
第2図 滝原塚周辺地形図 .....	3
第3図 滝原塚盛土実測図・土層断面図 .....	6
第4図 滝原塚旧表土遺存平面図及び遺物出土状況 .....	7
第5図 出土銭貨拓本 .....	8
第6図 出土遺物実測図 .....	9
第7図 盛土上石碑実測図・拓本 .....	10

## 写 真 図 版 目 次

図版1 滝原塚全景（南西より、南より、東より）	
図版2 滝原塚全景（北西より）、盛土上石碑（南西より、東より）	
図版3 盛土土層断面（東側、西側、東・北側）	
図版4 盛土土層断面（北側、南側）、盛土除去後状況（東より）	
図版5 出土遺物（石製品・陶磁器、銭貨）	
図版6 亀山神社、泉滝寺	

# 第 1 章 序 章

## 第 1 節 調査に至る経緯

千葉県では、近年の地域開発に応じて交通網の整備を図るため、道路網の整備を進めてきた。その一環として県道三島大多喜線の整備を計画し、事業を進めてきた。この度、その事業地内の埋蔵文化財について、千葉県教育委員会にその所在の有無の照会があり、千葉県教育委員会では埋蔵文化財として塚 1 基が所在する旨の回答をした。その回答に基づいて、千葉県土木部と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で、遺跡の取扱いについて慎重に協議が重ねられた結果、事業の性格上現状保存は困難なため、記録保存の措置を講ずることで両者の協議が整った。その結果、教育庁生涯学習部文化課の指示により、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定され、千葉県土木部の依頼により財団法人千葉県文化財センターとの間で調査委託契約が締結され、発掘調査を実施する事となった。

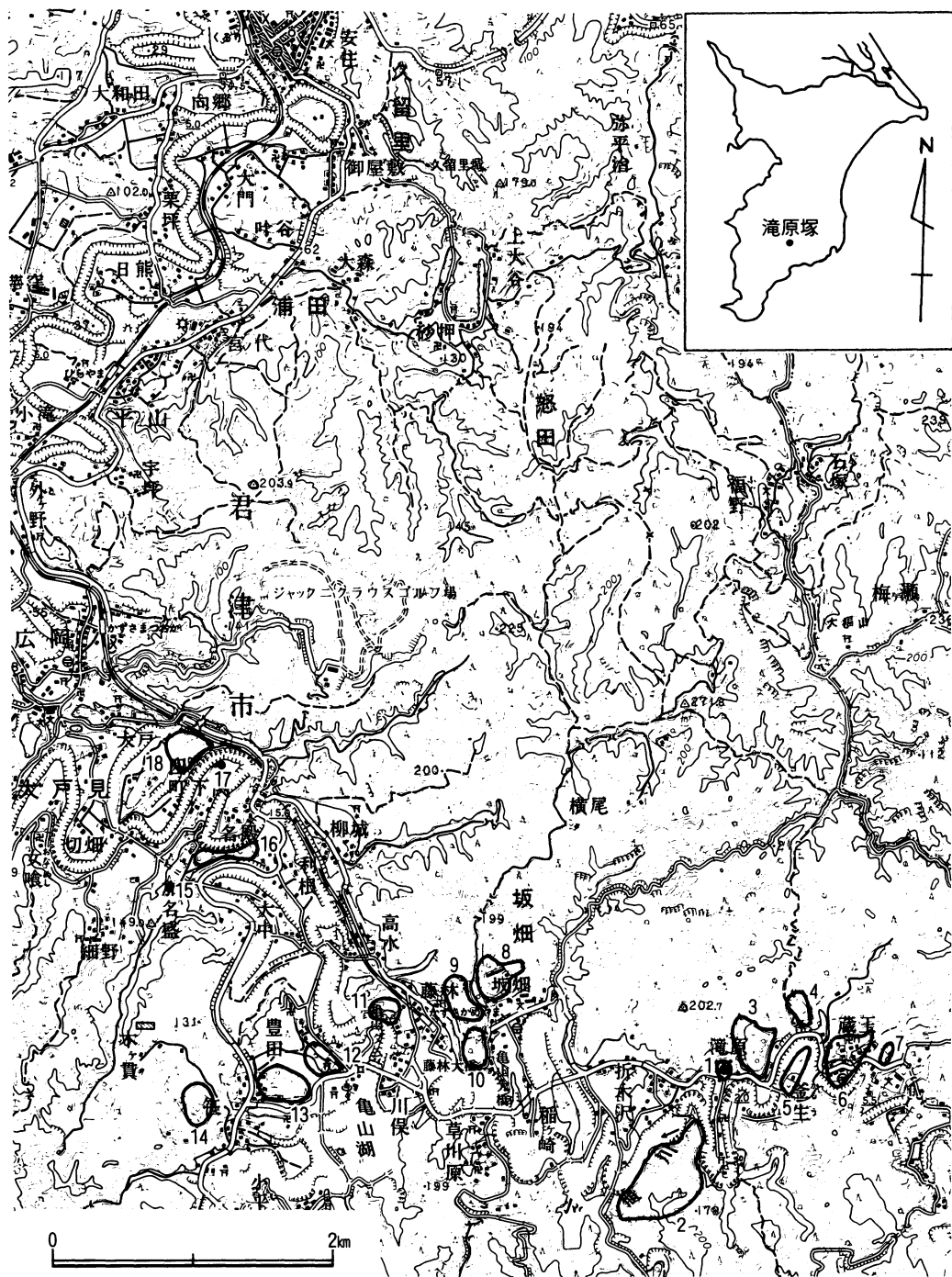
発掘調査は、平成 3 年 8 月 1 日から着手し 8 月 26 日まで実施した。整理作業は、発掘調査と並行しながら 8 月 31 日まで実施し、報告書作成作業を終了した。

## 第 2 節 遺跡の位置と環境

滝原塚（1）（2 ページ第 1 図の遺跡番号、以下同じ）は、太平洋に突出した房総半島の、ほぼ中央に所在する君津市のなかで南東端に位置し、市原市・鴨川市・大多喜町・天津小湊町との境界に近い。更に、これらの境界は分水嶺にも近く、東京湾に注ぐ小櫃川・養老川と、太平洋に注ぐ小河川とに分かれる。遺跡付近では、南から房総の霊峰清澄山に源を発する小櫃川が大きく蛇行しながら北流し、東京湾に注いでいる。小櫃川は、流路延長 88km・流域面積 273.2km<sup>2</sup>の県内では大きな河川であるが、その上流域の亀山地区には、県内一の貯水量を持つ亀山ダムが築かれ県民の飲料水の確保に大きな役割をはたし、同時に周辺観光の目玉としても位置付けられている。

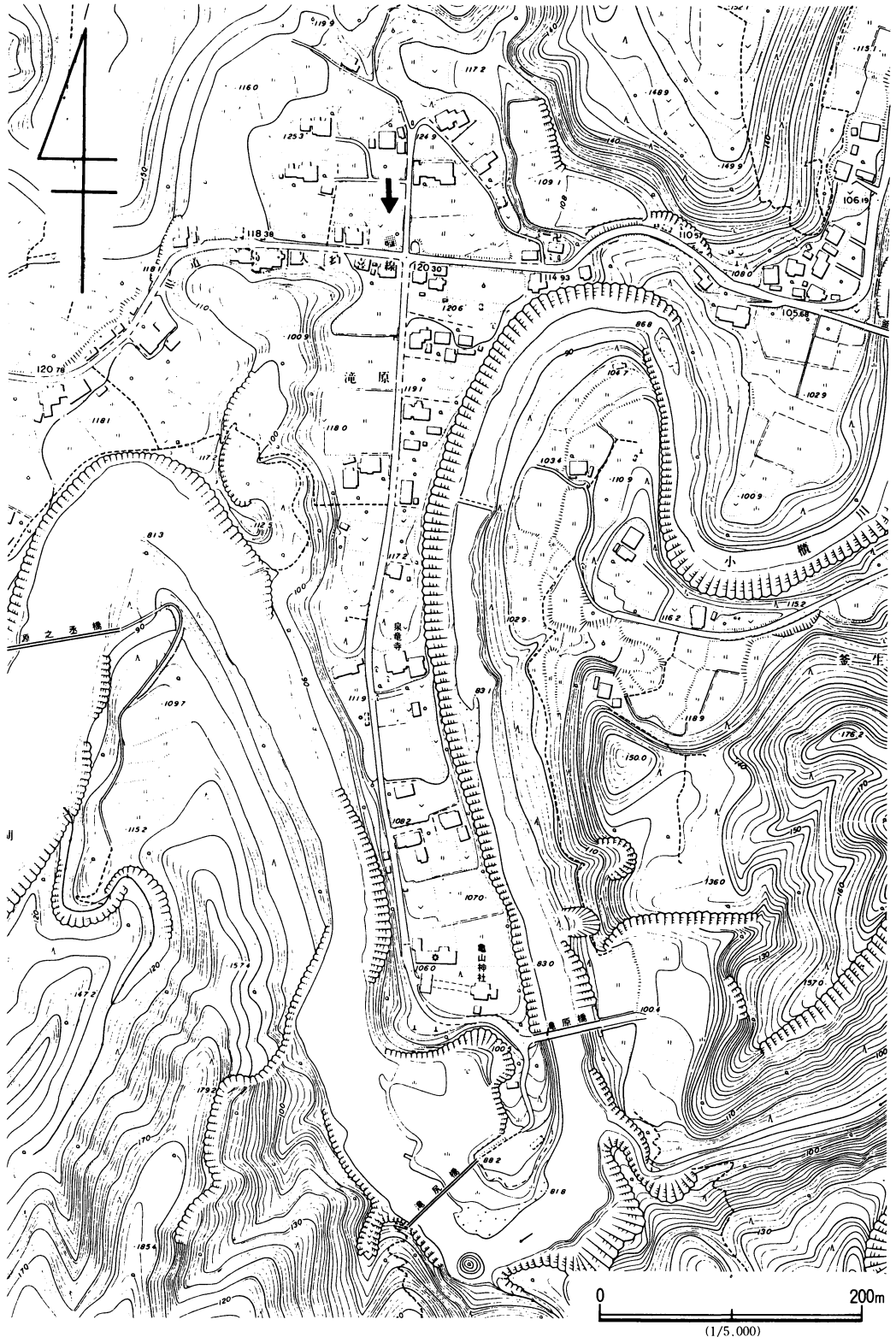
小櫃川は、その上流から河口に至るまで極めて蛇行が著しく、流路の変遷を繰り返していたようで、現在の地形図中にも旧河道が数多く見てとれる。河口近くではその沖積平野中に河道を幾度となく変え、遺跡周辺の上流域では河岸段丘として段丘崖下を流れている。上流域では、河川の側刻・下刻の侵食により、平坦な河床と垂直に切り立った河岸に囲まれた中を清水が流下している。段丘面と河床面との比高差は 20～30m を測り、溪谷の観を呈している。滝原塚の位置する河岸段丘上の標高は約 120m で、周辺の丘陵の頂上は約 250～300m 程を測る。

房総丘陵中に位置する遺跡周辺は、急峻な丘陵地で谷の侵食も深く、比較的自然環境が良く残されていたが、最近では周辺にゴルフ場建設等の開発の波が押し寄せ、それに伴い滝原塚に近隣した白井台北遺跡<sup>(1)</sup>（4）・蔵玉砦跡<sup>(2)</sup>（7）が（財）君津都市文化財センターによって調査が行われ、白井台北遺跡では、縄文時代早期・前期・中期の土器等が出土している。又、蔵玉



1. 滝原塚
2. 荏柄城跡
3. 外原遺跡
4. 白井台北遺跡
5. 白井台遺跡
6. 亀山城跡
7. 蔵玉砦跡
8. 坂畑東遺跡 (仮称)
9. 坂畑遺跡
10. 坂畑南遺跡
11. 藤林遺跡
12. 豊田遺跡
13. 前笹遺跡
14. 中笹遺跡
15. 経塚
16. 海老山遺跡
17. 道善坊塚
18. 大戸城跡・城ノ作遺跡

第1図 滝原塚及び周辺の主な遺跡 (国土地理院発行 1:50,000地形図、大多喜を使用)



第2図 滝原塚周辺地形図 (君津市発行 1:2,500都市計画図を編集)



砦跡の調査では、大きく分けて4郭に分類される平場遺構・空堀等が検出され、構造・歴史環境・周辺の社寺などからみて15世紀代までの築造で17世紀までには廃絶されたような状況が伺われた。蔵玉砦の西隣には亀山城(6)、小櫃川を挟んで滝原塚の南側には荏柄城跡(2)が存在し、荏柄城は塚の目前に望むことができる。亀山城跡は、以前は蔵玉砦跡と一体とみなされていたが、最近では別の城跡と見られている。荏柄城跡では、刀剣類・瓦片・焼米等が表面採集されている<sup>(3)</sup>。亀山城跡は、久留里城を本城とする里見氏の上総譜代の一支城であったとされ、東西600m×南北250mと小柄な城跡で空堀・物見台・櫓形・堀切・井戸跡等の施設がみられ、地名では小字で「堀ノ内」、「城見屋敷」、「馬場」等の地名が残されている。

滝原塚の南方500mには日本武尊を祭る亀山神社があり、古くは滝原不動として、付近に所在した滝壺から拾い上げられたと言う不動尊が祀られていたと言う。南方300mにはかつて滝原不動の別当寺であった真言宗蒲生山泉滝寺(かもうざんせんろうじ)(『上総国誌』には「釜生山泉流寺」とあり、現在君津市発行の都市計画図には「泉竜寺」としている)が所在し、塚の東側の道は滝原不動への参道として古くから存在し、現在の県道は近年になって作られたものということである。

滝原塚は、千葉県教育委員会発行の遺跡分布地図<sup>(4)</sup>には、滝原塚群として中・近世の塚三基の所在が記されている。しかし、今回調査時の現地踏査によると、塚は今回調査の滝原塚だけしか確認できず、他の2基については確認できなかった。

### 第3節 調査の概要

発掘調査は、平成3年8月1日から着手し8月26日まで実施した。調査着手前に、塚は地主の方によって祭祀が行われて魂が抜かれた状態になっており、雑草等はきれいに刈り払われ、地主の方の塚に対する畏敬と信仰の深さを伺わせていた。

発掘調査は、調査着手前の写真撮影、塚の現況実測作業に続き、塚盛土に、主軸とそれにほぼ直交するような副軸を設定し、盛土を四分してその対角方向の盛土部分の排土作業を行い、盛土断面の実測・写真撮影、ついで残りの対角方向の盛土排土作業により塚構築前の旧表土面の精査を行い、塚の調査は終了した。その結果、塚の盛土以外には遺構は検出されず、出土遺物は、盛土表面から石製品・陶磁器・現代銭・鉄銭が出土し、盛土最下層の旧表土上面から古銭7枚が出土した。

註 (1)『白井台北遺跡』 (財)君津都市文化財センター 昭和63年8月31日

(2)『蔵玉砦跡』 (財)君津都市文化財センター 平成2年2月

(3)大木 衛・小笠原 清編 『日本城郭大系 第6巻』 新人物往来社 昭和55年

(4)『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)―市原市・君津・長生地区―』 (財)千葉県文化財センター 昭和62年3月31日

## 第 2 章 遺 構 と 遺 物

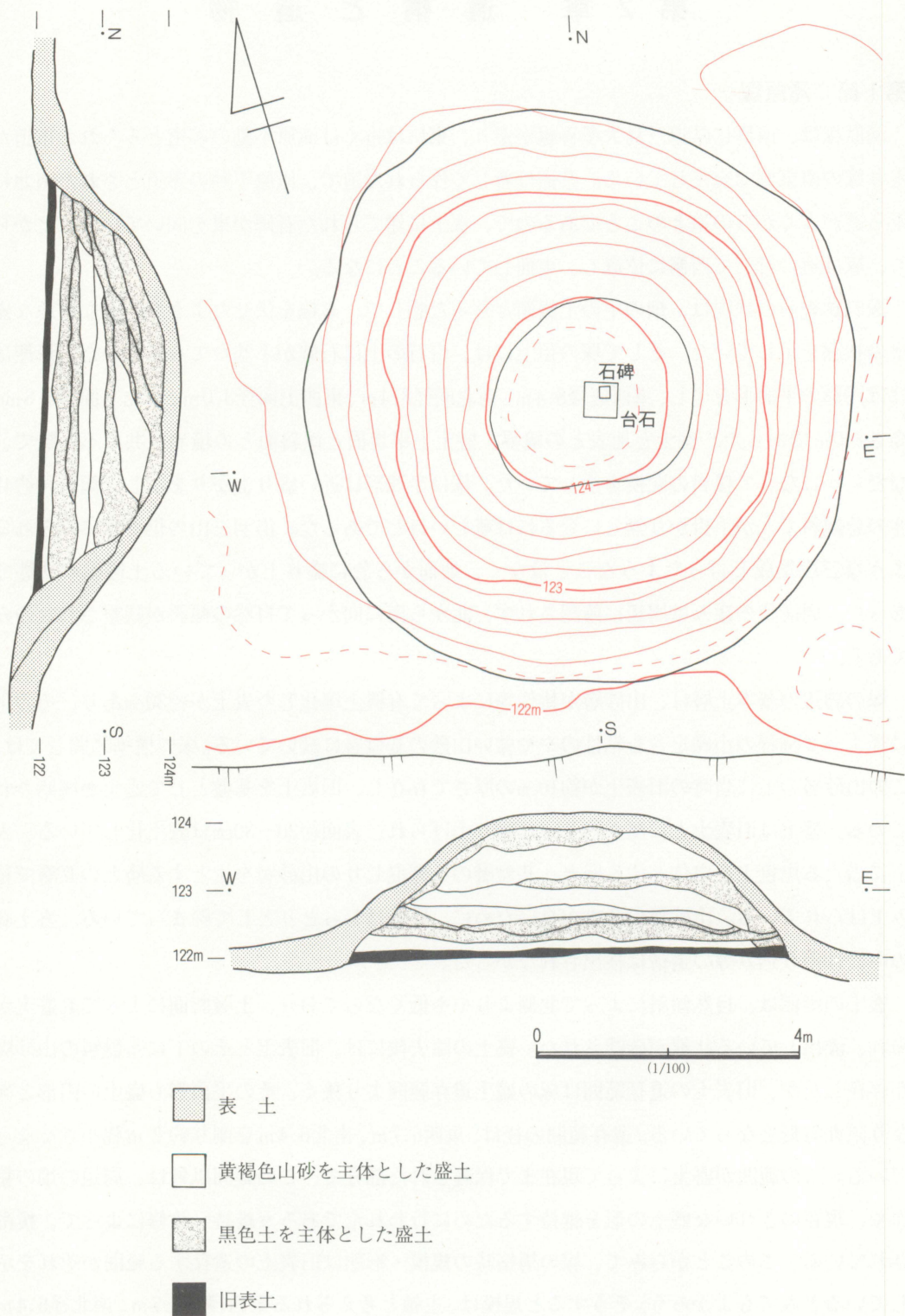
### 第 1 節 滝原塚

滝原塚は、南側に県道三島大多喜線が走り、東には古くは滝原不動の参道とみられる市道が走り塚の南東側で交差している。県道は新しく作られた道で、滝原不動の参道とされた南北に走る道が古くからの道とのことであるので、塚上に建てられた石碑が東を向いていたことから、塚は道に対して西側に位置し、東面していることになる。

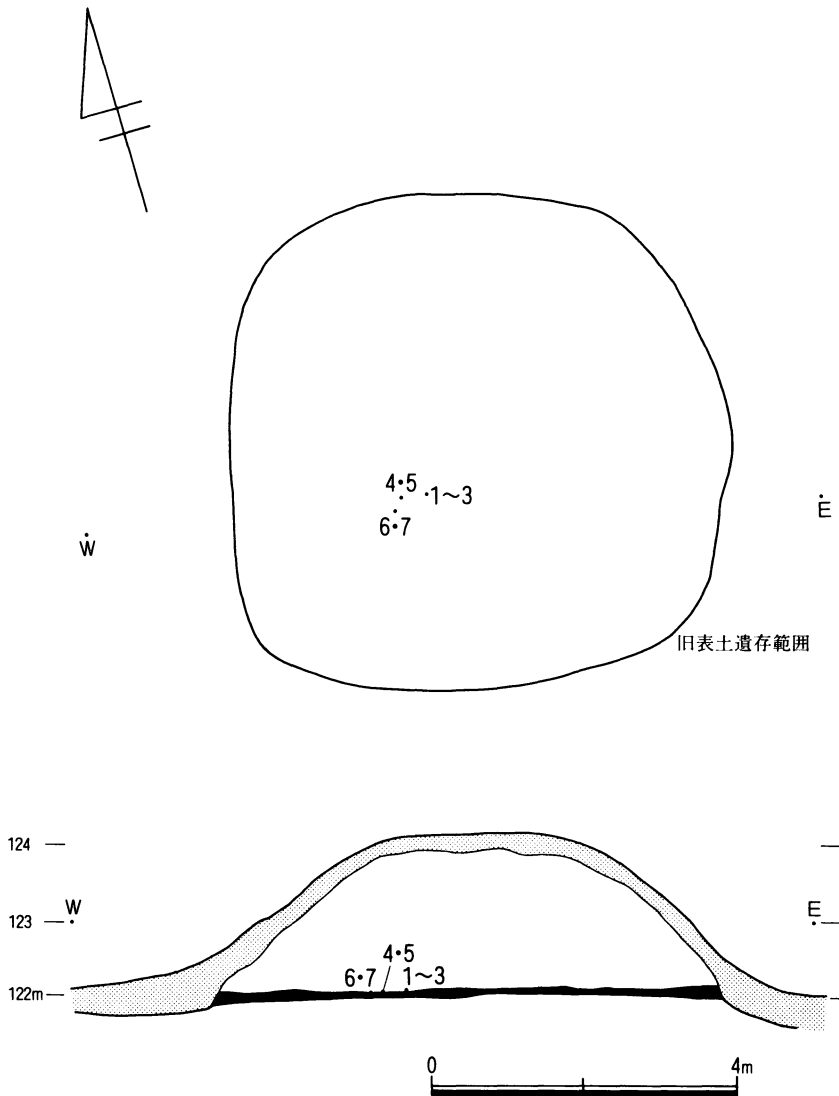
塚の調査前の状況は、畑の中の土饅頭と言った感じで、お椀を伏せたような、かなり急な盛土の状態を示していた。そして塚の頂上には、台石の上に石碑が1基たてられていた。形態はほぼ円形の平面形を呈し、東西底径8.4m、南北底径8.4m、東西上面径3.0m、南北上面径2.8m、高さ2.0mであった。盛土と地表との境界、盛土上平坦面と傾斜面との境界は共に不明瞭で、なだらかになって傾斜の変換を示していた。塚は半球形に近い盛り上がりを示し、傾斜角約45度の急傾斜で人が手掛かり無しに登るには難しいほどであった。出羽三山の供養塚にみられるような三段築成と言ったようなことはなく、地面から急に盛り上がっている土饅頭の状態であった。周溝状の窪みは周辺に確認されず、北から南に向かって自然の傾斜が観察されたのみである。

塚の周辺の基本土層は、山砂層が耕作等によって有機土壌化した表土が約30cmあり、その下に径1～2cm程の小礫を含む粘性のやや強い山砂の基盤層に続いている。塚の構築に関しては、この山砂層の上に当時の旧表土が約10cmの厚さで存在し、旧表土を基盤として盛土が開始されている。盛土は旧表土上に高さ約2mで盛り上げられ、表面約20～30cmは表土化している。表土に当たる黒色土を主体とする層と、基盤層の小礫混じりの山砂層を主とする層との互層で積み上げられている。山砂層の含水量が良いために、盛土はしっとりとして締まっている。盛土層の中には掘り込み等の遺構は検出されなかった。

盛土の南側は、自然傾斜によって北側よりやや低くなっており、土層断面によっても盛土が崩れ、流出している状態が確認された。盛土の除去後には、旧表土とその下に基盤層の山砂層が存在したが、旧表土の遺存範囲は塚の盛土遺存範囲より狭く、その平面形も盛土の円形と異なり隅丸方形となっている。遺存範囲の径は、東西6.7m、南北6.4mを測り約2m程小さくなっている。この範囲が盛土によって現在まで保護された部分で、この範囲以外は、周辺の畑の耕作や、現在のきれいな盛土の形を維持するために行われたであろう維持・改修によって、攪乱されている。このことからみて、塚の構築時の規模・形態は旧表土の遺存する範囲がそれを示しているとみてもよからう。そうすると規模は、主軸と考えられる東西径が6.7m、南北径6.4mの隅丸方形を呈するものと考えられる。調査前にみられた円形ではなく、旧滝原不動の参道に対して正対する隅丸方形であったと考えることとしたい。



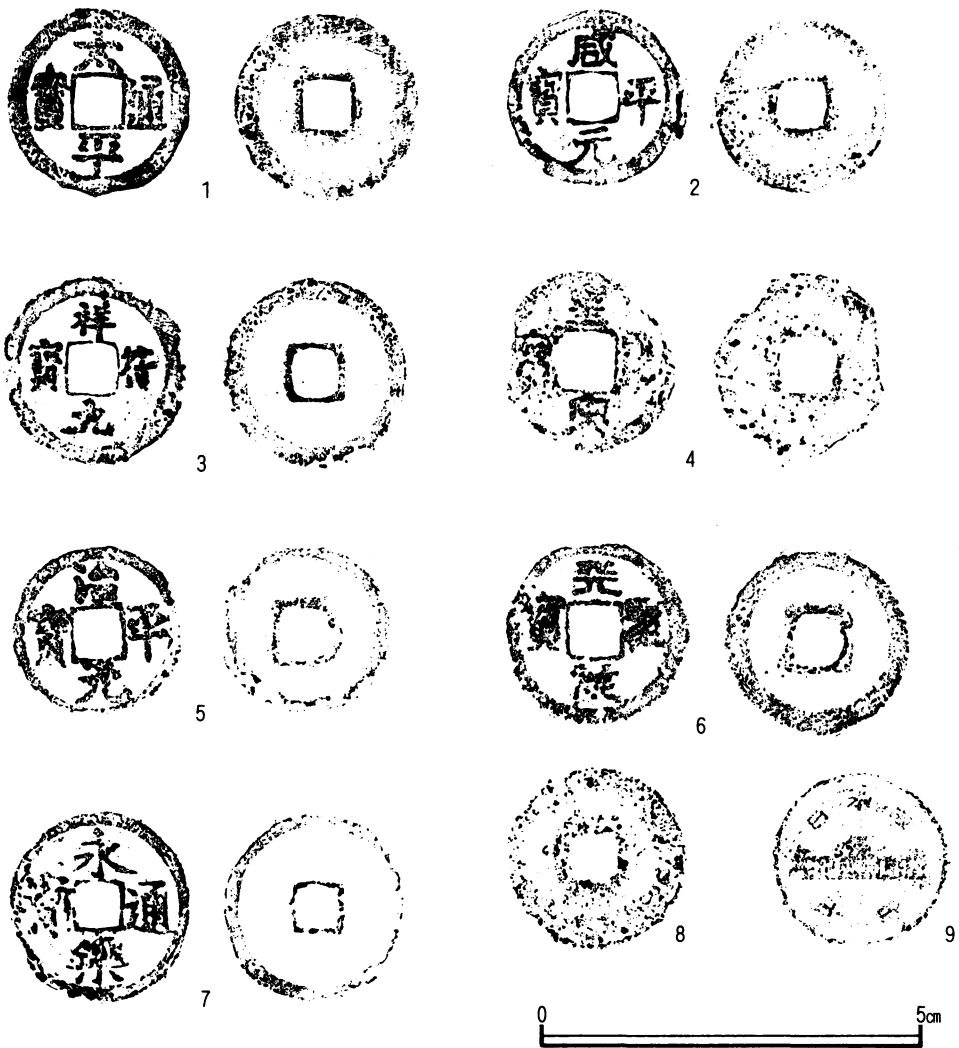
第3図 滝原塚盛土実測図・土層断面図



第4図 滝原塚旧表土遺存平面図及び遺物出土状況

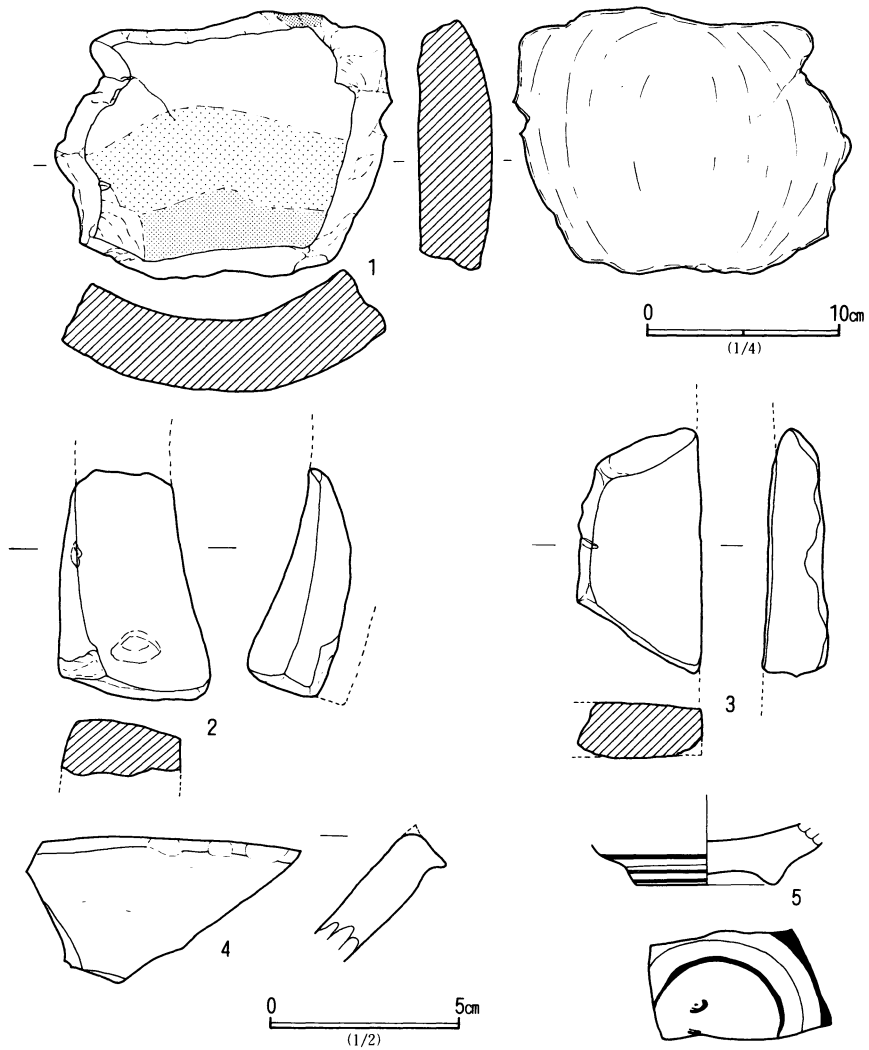
## 第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、古銭類と石製品・陶磁器である。(第5・6図) それらの中で、古銭類の内第5図の1から7までの古銭は、塚のほぼ中央に近い旧表土上に3組になって出土している。3組の隔たりは最大約50cmで近接していた。3組とも3枚、2枚が融着した状態で出土し、1から3は3枚が融着し、4・5は2枚、6・7は2枚が融着した状態であった。融着の状態は、やや斜めにずれた状態で張り付いていたことから、痕跡としては確認できなかったが、それぞれ3枚・2枚を紙か布のようなものに包んで、旧表土上に撒いたか置いたような状態が想定される。8・9は、塚の盛土上層の表土部分から出土しており、8は銭種不明の穴開き鉄銭、9は発行年が判読できない十円貨で、共に供養の際に塚に供えられたものとみられる。古銭類の計測値は表にしたのでそれを参照されたい。古銭類の内1から7のものは、塚



第5図 出土銭貨拓本

番号	銭種	分類等	初鑄年	時代	備考	外縁 外径 mm	外縁 内径 mm	内郭 外径 mm	内郭 内径 mm	外縁 厚さ mm	内縁 厚さ mm	文字 面厚 mm	重量 g
1	太平通寶	楷書	976	北宋		24.58	19.05	7.45	6.30	0.89	1.01	0.99	2.2
2	咸平元寶	楷書	998	北宋		23.23	18.65	7.45	6.28	1.09	1.08	1.10	2.4
3	祥符元寶	楷書	1008	北宋		24.70	19.23	7.45	6.25	1.03	0.89	0.99	2.0
4	皇宋通寶	楷書	1039	北宋		24.50	20.10	—	7.00	1.17	0.94	1.05	2.1
5	治平元寶	楷書	1064	北宋		23.20	19.43	7.98	6.28	1.36	1.25	1.20	2.4
6	天聖元寶	篆書	1023	北宋		24.43	19.98	7.95	6.25	1.10	1.24	1.06	2.9
7	永樂通寶	楷書	1411	明		24.80	21.03	6.93	5.30	1.23	1.10	0.95	2.3
8	不明	鉄銭			寛永通寶か	24.13	—	—	6.05	1.64	—	—	2.8
9	十円玉			昭和	年号不明	23.40	—	—	—	1.30	—	—	4.1

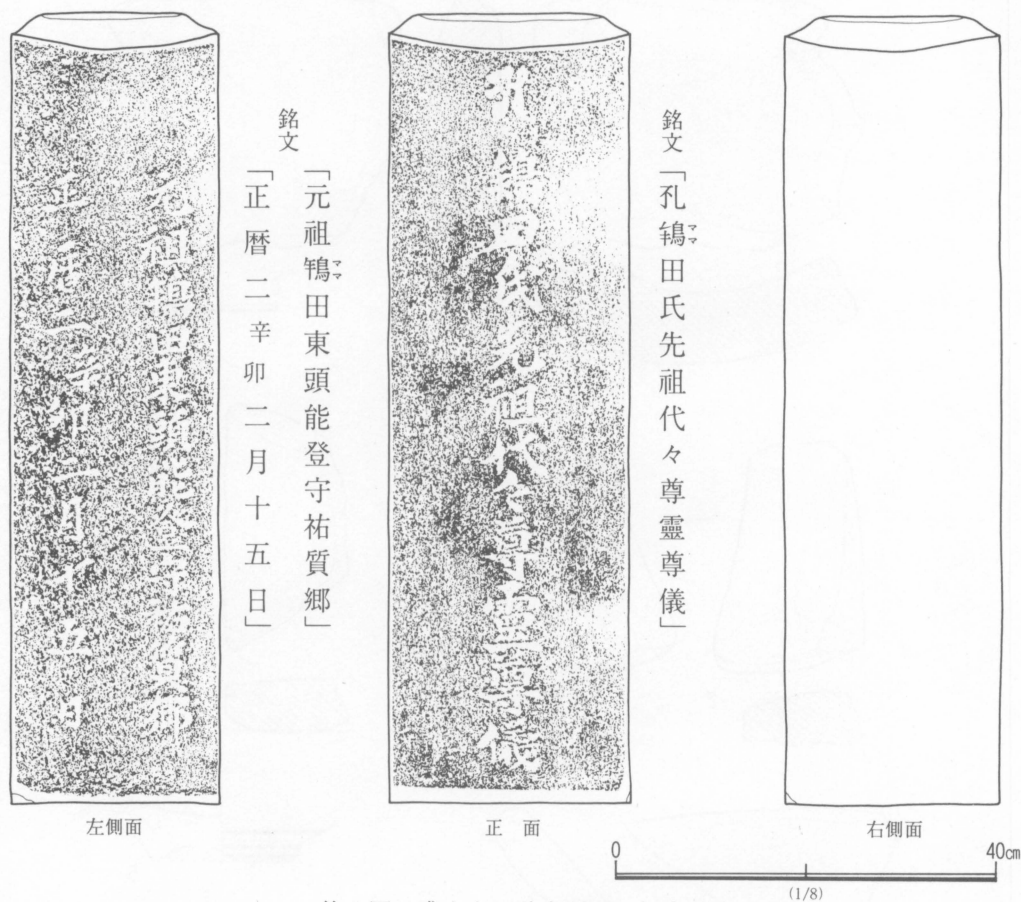


第6図 出土遺物実測図

の構築時に盛り土を始める前に地表面で何らかの祭祀をし、その際に用いたものと考えて良からう。

石製品・陶磁器は、すべて塚の盛土上層の表土部分から出土している。第6図の1は、安山岩製の仏像の後背か、石碑と思われるような形態を示し、裏面は緩い円弧状に丸みを持ち、表は逆に皿状に窪んでいる。内面と上面の一部に磨いた状態がみられ、実測図に磨きの状態を3段階に分けてスクリーントーンを貼って表示した。磨かれてはいるものの、全体的にはざらざらした表面で荒い磨きである。2・3は砥石で、凝灰岩製の破損品。4は常滑焼の片口か摺鉢の口唇部で15世紀後半から16世紀前半のもの、5は薄いコバルト釉の染め付けの磁器の碗の底部で近世後期のものである。

塚の頂上に、石製の台石の上に据え付けた石碑が1基存在していた。この石碑は、地主の方



第7図 盛土上石碑実測図・拓本

(鵜田真夫氏)が今回の塚の替わりとして、新たに塚を作られる時に祀るとのことで調査時に実測・採拓して地主の方にお渡ししたので、遺物としては取り上げをしていない。また、鵜田真夫氏のお話しによると、家にあった最も古い位牌(記録)をもとに昭和の初期に石碑を建立したとのことで、石碑そのものの形態からいってもその通りと考えられるので問題はないだろう。

石碑の大きさは、長さ82cm、幅25.8cm、奥行き21.8cmを測る。材質は安山岩で、平滑に研磨され碑文が陰刻されていたが表面はかなりの風化によってざらついていた。碑上部は、稜を持って丸く仕上げられている。正面と左側面には陰刻があり、正面は「ア(梵字)鵜田氏先祖代々尊靈尊儀」、左側面には2行にわたって「元祖鵜田東頭能登守祐質郷」「正曆二辛卯二月十五日」と刻まれている。

## 第 3 章 ま と め

### 第 1 節 滝原塚の性格について

滝原塚の今回の発掘調査によって塚の性格が明確になったとは言い難い。塚の規模・形態については発掘調査によってかなり正確に把握できたが、築造の目的・性格は、それを明らかに物語るような遺物の出土がなかったためかなり難しい。性格を知るのに役立つような遺物は、旧表土上から出土した古銭だけと考えられる。古銭は7枚出土し、古いものから順に並べると、太平通寶・咸平元寶・祥符元寶・天聖元寶・皇宋通寶・治平元寶・永樂通寶各1枚で、初鑄年をみると、西暦976年・998年・1008年・1023年・1039年・1064年・1411年となって北宋銭が6枚、明銭が1枚となる。塚の構築時に3枚、2枚、2枚とまとめて紙か布の様なものに包んで、地表面に撒いたような状態で出土しているのので、塚は古銭の流通時期をもとにして考えると、永樂通寶の発行以降に構築されたことが確認できる。また、後世広く世間に流通した寛永通寶が古銭の中に見られないことから、塚の構築は寛永通寶発行以前のものと考えたい。つまり、永樂通寶発行から寛永通寶発行までの、15世紀前半から17世紀前半頃まで約2世紀にわたる期間が想定できる。

一方では、地元(1)の塚についての言い伝えをみると、地元泉滝寺の記録の写しである「泉滝寺記録鑑」に正暦2年2月15日に逝去した「東頭院竜岩泰了居士(鴛田助質)」の塚が滝原塚であると言われている。(石碑には鴛田東頭能登守祐質と刻まれている。)この鴛田助質の供養塚として塚が該期に作られたという可能性は考えられる。

別に、15世紀前半から17世紀前半頃までの時期で、この塚に関連のあるような他の資料があるだろうか。この塚の立地を見ると、滝原不動の参道に東面した塚という面を意識すると、先ず滝原不動がその時期に存在していたかということが第一に気にかかる。次に滝原不動と塚の何らかの関係を示すものがあるかどうかということも気にかかる。このことについては、滝原不動の創建は「泉滝寺記録鑑」によると、正暦2年に逝去した鴛田助質が滝壺から出現した不動像と太刀とを交換したのが滝原不動であるとされており平安時代にまで遡り得る。しかし、それ以降の記録はほとんど中断し、次に現れるのは中世の16世紀になってからのものである。

さて、滝原塚周辺に目を広げると、現在でもそうであるが周辺に自然を信仰の対象としたとみられる社寺が幾つか見受けられる。滝原不動に始まり、三石観音、寂光不動、高宕観音、滝見不動などであるが、現在では三石観音だけが信仰を集めているにすぎないといってよい。三石観音は巨石信仰(巨大な3つの石)、寂光不動は龍穴信仰(雨水信仰)、高宕観音は神水信仰、滝見不動と滝原不動は滝信仰によるものである。これらは丘陵とはいえず、房総半島中に於いては深山幽谷の地である遺跡周辺の地に、興るべくして興った自然崇拜を起源としたものであることは想像に難くない。その自然崇拜を起源とした信仰は、古くは神道考古学で言われる岩磐



等に対するものと、共通の感情によるものであろう。ただこの地では神道考古学系の祭祀遺跡は現段階では確認されておらず、仏教系の修験道によるものとして龍穴信仰、滝信仰等という形で現在に至っているものとみられる。この地には、地域が狭い割には古くからの寺院が多くみられることから、修験道を中心とした山岳信仰の一端が窺えるものであろう。

ただし、今回調査の滝原塚を修験道に直接結び付け得るような遺物・遺構はなかったことから、以上のような指摘も周辺環境や、やや曖昧といわざるを得ない資料をもとに、推測を重ねた結果によるもので類推の域を出るものではない。

## 第2節 周辺遺跡等の関連について

この滝原塚の構築されたとみられる15～17世紀前後の時期は、この周辺には蔵玉地区に滝見不動・蔵玉砦・亀山城、滝原地区に滝原不動・荏柄城、やや離れて三石観音・寂光不動等が所在し、中世後期から近世初頭まで活発な活動が行われていたようである。中世戦国期には、この地は、小櫃川を下った久留里城の山城として大多喜方面からの警備・防御の拠点として位置づけられた亀山城や荏柄城が存在し、その城を支えた領主・士層が定着しつつある時期であったと見られる。そして、戦国期も終わり混乱から平穏な時期へと移行するにつれて、領主・士層がそのままこの地に定住し、生活を固めていった時期であると思われる。士層から農民への転換は、当時の時流として常識的なものであり、政策的にもそうするしかなかったというのが実状であろう。士層から農民へという流れの中で寺院が創建・拡充され、経済基盤の安定につれて、信仰も厚くなり、信仰への裏付けとして縁起類の充実・整備がなされていったという見方もできる。その時点に於いて滝原不動を含む寺社の創建もしくは、拡充の一貫として滝原塚が構築されていったという見方も出来よう。

## 第3節 結語

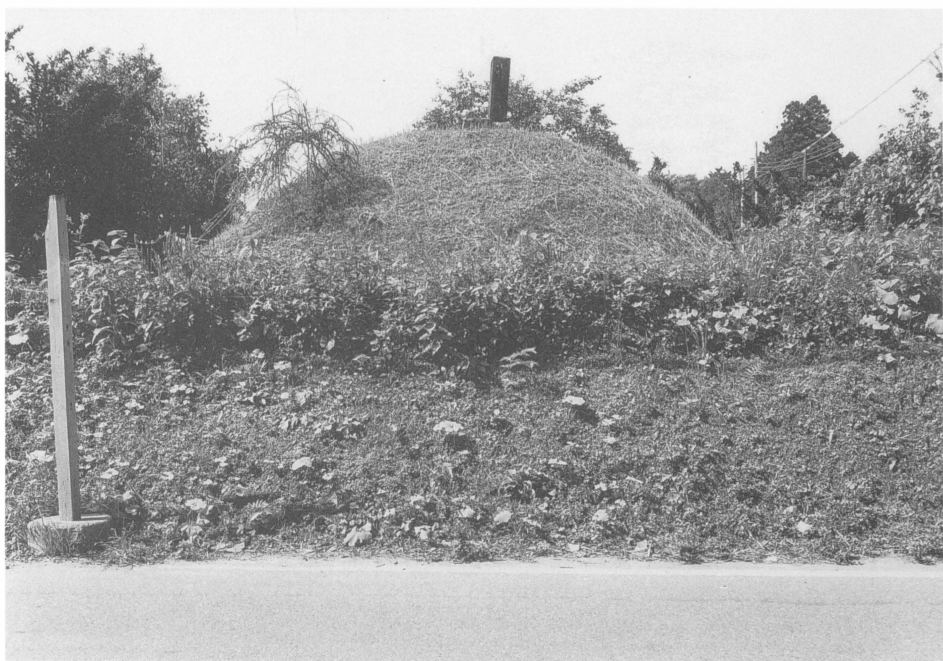
今回の発掘調査によって、塚の形態・規模が明らかになり、その性格についても周辺環境や出土遺物等からいくらかの推測をする事ができた。それにより房総丘陵の内陸部に置ける中世後期から近世初頭にかけての城郭・社寺の存在が地域への定着・定住と関連を持っているであろうことが認識された。一方、地元には言い伝えられていた鳩田助質の塚であるとの確証は得られず、逆に言い伝えられてきた平安時代のもではなく、中世後期から近世初頭にかけての構築である可能性が非常に高いことが解った。しかし、中世から現代まで塚を維持・管理し信仰の対象としてきた、歴代の地元の方々の崇高な信仰心・祖先に対する畏敬の念を今回の調査で強く感じ、これからもこのような信仰心が保たれていくことを願った次第である。

註 (1) 菱田忠義・鶴岡節雄「上総町の民俗信仰」『千葉文華第5号』昭和47年1月20日

# 写 真 图 版



滝原塚全景  
(南西より)



滝原塚全景  
(南より)



滝原塚全景  
(東より)



滝原塚全景  
(北西より)



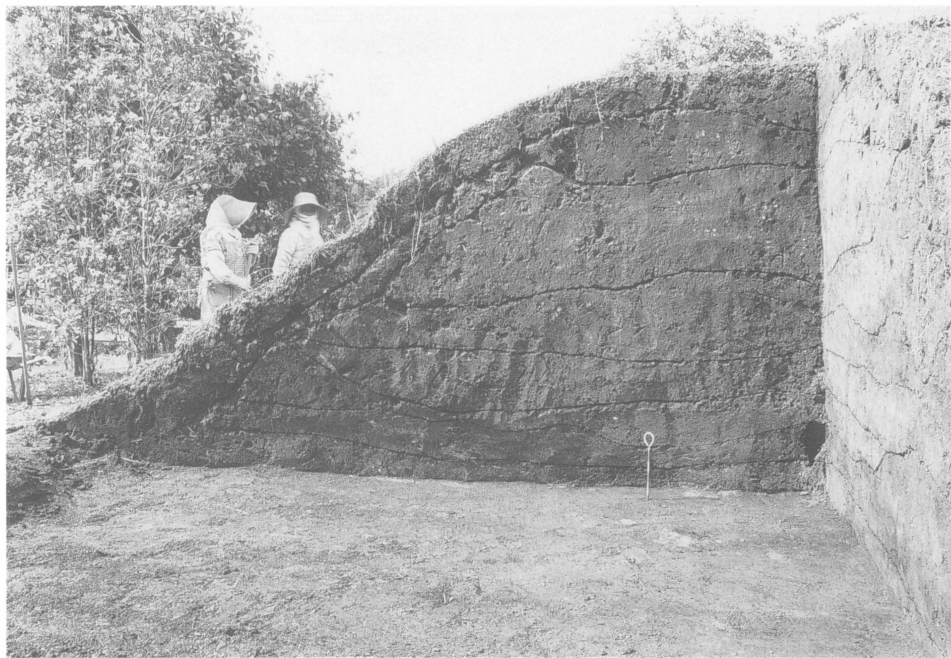
盛土上石碑  
(南西より)



盛土上石碑  
(東より)



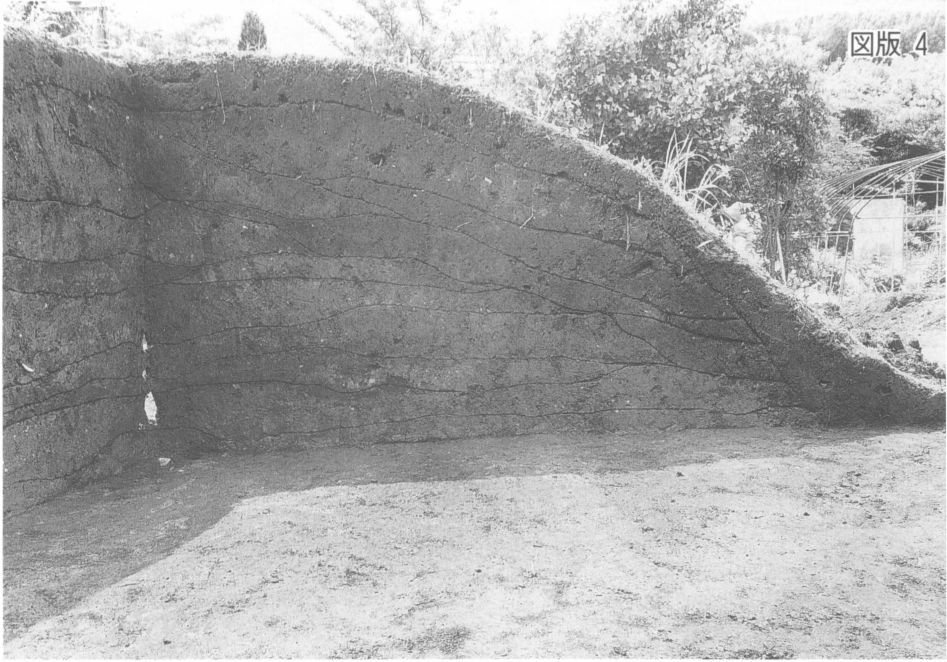
盛土土層断面  
(東側)



盛土土層断面  
(西側)



盛土土層断面  
(東・北側)



盛土土層断面  
(北側)



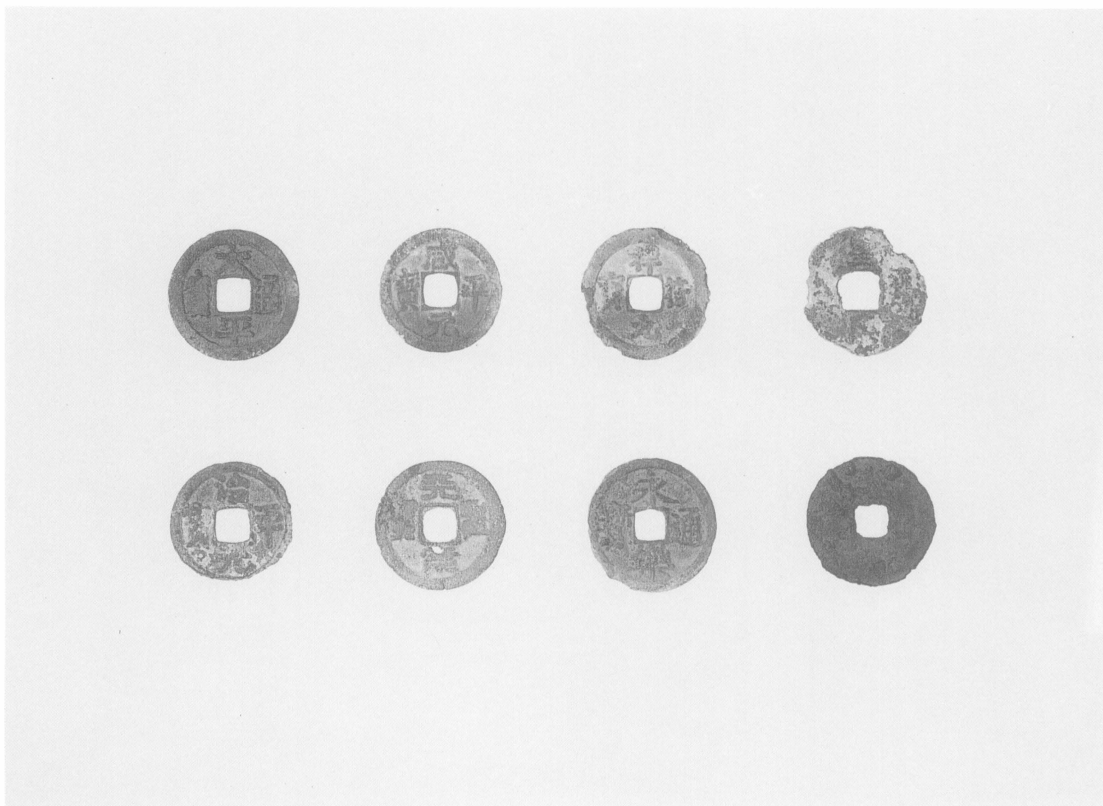
盛土土層断面  
(南側)



盛土除去後状況  
(東より)



出土遺物（石製品・陶磁器）



出土遺物（錢貨）



亀山神社



亀山神社



泉滝寺



千葉県文化財センター調査報告第211集

---

平成3年12月20日 印刷

平成3年12月25日 発行

## 君津市滝原塚

— 一般県道三島大多喜線特殊改良工事

第1種に伴う埋蔵文化財調査報告書 一

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉県四街道市鹿渡無番地  
発行 千葉県土木部  
印刷 大和美術印刷株式会社

---